子育てのゴールはどのあたりに?
–能登半島地震で避難者支援を続ける中で感じたこと–

越田　理恵
金沢市福祉健康局 担当局長　兼　金沢市保健所長

2024年1月1日16時10分、私は金沢駅で、帰省中の長女家族に持たせる土産物の品定めをしていた。そこここに笑顔があふれる賑わいの中、突然、携帯アラームが一斉に鳴り、ほぼ同時にこれまで経験したことのない大きな揺れが襲ってきた。観光客や帰省客でごった返していた駅構内から、人々は出口目掛けて一斉に駆け出した。私は一瞬、このガラスドームが落ちてきたら・・・と思い、コンコースに踏みとどまっていたが、程なくして天井から大量の水が流れ出してきたため、屋外に出た。頭の中でミッションを切り替え、大津波警報が出ていることを知らずして、駅より海側にある災害時救護所になっている保健所に向かった。が、到着するや否や、警備員さんの緊迫した声が聞こえた。「先生、すぐに隣の合同庁舎の6階に上がって!」

金沢市の保健行政のど真ん中で3年半、懸命にコロナ禍に対峙してきたので、今年こそはと頭の中で描いていた様々な構想はいっぺんに吹き飛んでしまった。今回の地震は同心円状に被害が広がる災害とは異なり、能登半島の先端が震源地で、その付け根っこの金沢市は殆ど被害がないながらも、多くの避難者を受け入れ、受援と支援を同時に進めながら「避難された方々の命を守る」という難しい役割を担うことになった。気づいたら元旦から2か月間、1日も休むことなく働き続けていた。改めて心身共にタフに生み育ててくれた天国の両親に手を合わせて感謝した。

生涯“小児科のお医者さん”を続けるつもりだったが、医局人事で、大した志もなく腰掛け程度のつもりで金沢市に奉職して既に4半世紀が経過した。保健所を持つ中核市の“市役所のお医者さん”として雇われたが、小児科医というバックグラウンドから、児童福祉部署にも配属され、保育所や児童館、子育て支援や少子化対策に携わり、中核市として初めて設置された児童相談所の統括も経験した。また教育委員会の配属時には、不登校や発達障害、医療的ケア児等々に係る学校現場との橋渡し役を担ってきた。

臨床も研究も感染症や予防接種の領域を中心に仕事をしてきたので、保健所でも対人・対物に関わらず感染症対策には違和感はなく、また培ってきた人脈の後ろ盾もあり、コロナ禍も何とか乗り切ってきた。しかし、今回の災害対応は明らかに違っていた。指揮を執る立場の者にとっては、俯瞰的かつ瞬時に物事を判断する力、心根の強さと優しさのバランス、そしてキリのいいところで諦める潔さが必要だった。

混乱した現場の真っただ中に身を置きながら、受援者も支援者も、こどものころからの育ち、すなわち家族やこどもを取り巻く大人との出会いの中で、一見、寄り道とも思える様な経験をどれだけ積み上げてきたか、言わば一人の人間としての生きる力が問われているような気がした。有事にあっても冷静を保つことができる、逆境にあっても前を向くことができる大人になること、子育てのゴールはこのあたりにあるのではないかと考えるようになった。しかし、私の中での答えはまだ見つかっていない。

第72回日本小児保健協会学術集会は、“こどもたちに夢と希望を贈る「子育て文化」の創造”をテーマとして、金沢市で開催します。寄り道いっぱいのこどもの体験を支える文化が根付いている金沢の地で、多くの方々と一緒に子育てのゴールについて考えてみたいと思います。

Presented by Medical*Online